

第四十節の隠された歴史 — 第五番

最初の四箇条を新たにする

Jeff Pippenger

2026-04-01

第40節の隠された歴史を明らかにすることに戻るにあたり、まずこの連載の最初の四つの論考の基本事項を再確認することが賢明と思われる。この連載の四つの論考のうち第一のものは、キリストをユダの部族の獅子（またアルファでありオメガである方）として描き、決定的な時点においてダニエル書第11章の諸部分の封印を解き、十四万四千人の最後の改革運動を導かれるという預言的解釈を提示した。そこでは、第一天使と第二天使の歴史が第三天使のメッセージの歴史と一致することを示し、そのことによって、1989年に（1863年のアドベンチストの反逆から126年後）、獅子がダニエル11:40-45の封印を解いたことを明らかにしている。封印を解かれたそれらの節は、1798年における教皇制の致命的な傷、その癒やしが竜、獣、そして偽預言者の三重の結合を通して進み、ついには第45節の「栄えある聖なる山」におけるハルマゲドンへと至る過程をたどっている。十四万四千人の運動が、合衆国における間近に迫った日曜法へと近づく中で、第40節の隠された歴史（1989年からその日曜法に及ぶもの）は、2023年7月に封印が解かれ始めた。

エレン・ホワイトの注解、すなわち、終わりの日に関するダニエル書の封じられていない部分は、立つべき民を備えさせる「知識の増加」を生み出す、との見解に基づけば、「油」は十人のおとめのたとえにおいて聖霊、神的な諸消息、そして品性として示されている。この開封は、ダニエル12:10の三重の試みの過程を引き起こし、そこでは多くの者が「清められ、白くされ、試みられる」。この歴史は、1989年に始まり、2001年9月11日を経て、2023年7月に終わる、預言が開封された幾つかの預言的時点を表している。これらの種々の開封は、1989年から9/11までの期間、9/11から間もなく到来する日曜休業令までの期間、そして2020年7月18日から2023年12月31日までの遅延の時の期間を表しており、その間、真夜中の叫びのメッセージは日曜休業令に至るまで漸進的に開封されるのである。

エゼキエル37章の枯れた骨によって、また、御霊に満たされて立ち上がる黙示録11章の二人の証人によって表象される、十四万四千人の中に加えられるべき候補者たちの覚醒は、封印を解くことによって成し遂げられる。もし神の民が、教皇権や日曜法のような危険を示すこの「尊い光」に目覚めることに失敗するならば、異端が彼らをふるいにかける（穀殻を麦から分けるように）。1888年のブレア法案や愛国者法のような先行する預言的道標は、預言的警告として位置づけられている。その論考は、ダニエル11章の中に示されている預言史のそれ以前のすべての系統が、40-45節において反復されることを明らかにしている。またその論考は、獣の像が、321年と最初の日曜法によって予型的に示されるように、まず合衆国において形成され、次いで世界において形成されること、そしてそれに続いて、ミカエルが立ち上がり恩恵期間が閉じるとき、538年によって予型的に示される全世界的な獣の像が現れることを明らかにしている。

四つの記事のうち第二の記事は、2001年の愛国者法を、黙示録13章11節の成就として合衆国が「語る」ことと特定することにより、預言的枠組みを継続している。愛国者法は、聖書預言の第六の王国の初めにある三つの道標、すなわち1776年の独立宣言、1789年の憲法、1798年の外国人法および治安諸法に並行する、三つの憲法的否認の第一のものであった。1888年の失敗に終わったブレア法案、すなわち全国日曜法を試みたものは、西暦66年のケスティウスの包囲のように撤回されたが、その両者はいずれも、愛国者法が合衆国における獣の像の試みの期間を開始した2001年を予型していた。愛国者法は1776年に対応しており、英米法の「有罪と証明されるまでは無罪」というコモン・ローを、ローマ法の「無罪と証明されるまでは有罪」というシヴィル・ローに置き換えた。中間の道標は1789年によって表されるが、すなわち2022年1月に始まったペロシ裁判は、政治的ローフェア、偽旗作戦、および行政機関の腐敗を通して、手続的適正手続および実体的適正手続を踏みにじり、基本的権利を公然と否認した。2001年の愛国者法、2022年のペロシ裁判、そして来たるべき日曜法における、これら三つの「語る」ことの道標は、合衆国憲法のあらゆる原則を漸進的に否認するのである。

そのとき、プロテスタント主義は教皇主義および心霊主義と手を結び、この三重の連合において、合衆国は竜のように語り、獣の像を完全に形成し、その恩恵期間の杯を満たし、第六の王国としての存在を終える。国家的背教ののちには、国家的破滅が続く。日曜法における「語ること」は、321年におけるコンスタンティヌスの最初の、かつ初めの日曜法によって予表されており、そしてその終結と最後の日曜法は538年によって表されている。

これらすべての出来事は、ダニエル11:40の預言的歴史の中に秘められており、それはミラー派の系統線、またキリストから十字架に至る系統線とも並行して進行する。黙示録12:15-16は、かつて竜の迫害の洪水を呑み込んだ「地」として合衆国憲法を描いているが、その「地」は、やがて到来する日曜法の時に、ついには竜のように語るのである。エレン・ホワイトが『教会へのあかし』第5巻（711頁および451-452頁）において、教皇制に譲歩するいかなる宗教的立法についても、また日曜法が竜の霊を明らかにすることについても警告していることは、1776年、1789年、1798年という三つの段階が、最終的な試験において完結する最後の三段階の試みの過程を予表する道標であることを裏づけており、そしてその試みの過程こそが、神の民を立たせるための備えをなすのである。

第三の記事は、『教会へのあかし』第5巻451-452頁におけるエレン・ホワイトの警告をさらに詳述し、合衆国において間もなく到来する日曜法が、国家が義から完全に断絶し、三重の結合（プロテスタント主義がローマ教会主義および心霊主義を握ること）を成就する決定的瞬間を画するものであると主張している。そのとき合衆国は、プロテスタント的かつ共和的政府としてのあらゆる憲法上の原則を放棄し、教皇制の惑わしを流布する。これこそ、神の忍耐の限界に達したことを示す合図であり、こうして国家の不義の杯を満たし、憐れみの天使の去ることを促し、国家的破滅を開始させるのである。そのとき、「いつまでですか」という第五の封印における殉教者たちの叫びへの答えが、第二の教皇制の殉教者の一群が満たされるときに到来する。竜の霊は、「日曜運動」が語るときに明らかにされ、それは、滅びに先立って諸都市から逃れるべきしるしとして、現代の「荒らす憎むべきもの」（ダニエルによって語られ、キリストによって言及されたもの

）として機能する。日曜法は、2001年に愛国者法によって始まった憲法の漸進的な放棄の帰結であり（それは、1888年のブレア法案、紀元66年のケスティウスの包囲、キリストのバプテスマ、1840年8月11日、および『独立宣言』によって予表されている）。

合衆国における獣の像の形成の期間には、複雑な二重の系統が含まれており、それは並行する共和主義（政治的）およびプロテスタント（宗教的）という二つの「角」に関わるものであり、最終的には日曜法の政教共同による執行において結合する。その関係は、教皇権の獣における女による獣の支配を映し出しており、教会と国家の分離という憲法の核心的原則が覆される時に完全に現される。

内的には、獣の像を試す時は、すべての人々のうちにおける品性形成（キリストの像か、サタンの獣の像か）を試し、賢い処女と愚かな処女とを分ける一方、外的には、終わりの日の政治的闘争、同盟、そして破られた条約を明示する。2001年から日曜法に至る期間は、後の雨の散布を開始する（それは、2001年9月11日に黙示録18章の天使が降り、大なる建物であるニューヨークの崩壊を通して地を照らした時に始まる）。9・11は、黙示録10章にあるように食べられるべき「小さな巻物」の使命を受け入れるか拒むかによって、ラオデキヤ的セブンスデー・アドベンチズムのふるい分けを開始する。麦と毒麦は、日曜法におけるその分離の時まで共に残る。その時、一四万四千人は旗として高く掲げられ、321年から538年によって予表された、全世界的な獣の像形成の最中に、後の雨の完全な注ぎの到来が起こる。それから、バビロンからの大群衆の召集が、ミカエルが立ち上がり、恩恵期間が閉じる時まで始まる。これは、審判が9・11からまず神の家において始まり、その後、日曜法以後に第十一時の働き人たちへと及ぶことと一致する。

第三の記事は、天の栄光と過去の迫害とが交錯し反復される時期を生き残るためには、イザヤ28章の「行に行を加え、ここにも少し、そこにも少し」という方法論によって、あらかじめ預言を熟知していなければならないことを強調している。その方法論は、ダニエルの高潔な人々、ペンテコステ以前のキリストの弟子たち、ならびに炉の中にいたシヤデラク、メシャク、アベデ・ネゴによって例証されており、彼らは、サタンの驚くべき働きと偽造のただ中であっても、「記されている」との御言葉の上に堅く立つ備えのできた者たちの予表となっている。

第四の記事は、アメリカ合衆国における獣の像の形成に関する預言的試験の過程が、三つの憲法上の道標——初めの「語ること」としての2001年の愛国者法、中間としての2022年のペロシ裁判、そして最後としての日曜法——と並行して進み、かつそれらと絡み合っていることを説明している。この試験の過程は、賢い乙女たち（十四万四千）を、国民的背教が破滅へと導く日曜法において始まる、迫害という戴冠的試験に耐えられるよう備えさせるものである。そのときサタンは、神であると主張しつつ奇跡を伴う驚くべき偽物を解き放ち、天の栄光は過去の迫害の反復と入り交じるが、それによって神の民は、神の御座から発する光の中を、少しも動じることなく歩むことができる。この備えは、キリストがヨハネ六章において取られた戦略（『各時代の希望』394頁の注解にあるとおり）を映し出している。すなわち、主は、自己本位の追随者たちを早い段階でふるい落とすために厳しい試験を許し、御自身の臨在によって、真の弟子たちをその究極の試験（ゲツセマネ、裏切り、十字架刑）のために強められたのである。同様に、獣の像の試験——内的な品性形成（キリストの像対サタンの獣の像）と、外的な政教分離を覆す教会と国

家の結合とを包含する——は、ラオディキア的アドベンチズムをふるい分ける。この試験は、イザヤ28章のline-upon-lineの方法論を通して、封印されていないメッセージを受け入れることにより、賢い者たちを清める。

開封された光とは、第七の封印の光（黙示録 8:1-5）であり、聖徒たちの祈りへの応答として地に投げ下ろされる火として現され、ペンテコステの注ぎにおける火のような舌によって予表されたものである。開封された光はまた、ミラー派の真夜中の叫び（それは至聖所への信仰による入場を備えた）によっても表されており、それはダニエル 11:40の隠された歴史の中で、2023年7月に開封された現代の真夜中の叫びにおいて成就されるのである。9/11 以来の後の雨の散布のメッセージは、教皇制と日曜法に関する知識の増加、および七つの雷鳴の開封を伴い、四十節の隠された歴史とともに、イエス・キリストの黙示の開封のうちにすべて包含されている。獣の像形成についての詳細な預言的照明——共和党およびプロテスタントの二つの角の闘争、政党、ラオデキヤ的アドベンチズム、十四万四千人の出現、イスラムの第三の災い、ロシア、国連、教皇権、ならびにハスモン朝との類比を含む——は、知恵ある者たちが、過去の導きを忘れることなく（『牧師への証』31頁）、神の導きを認識し、それをわがものとするための備えを与えるのである。

「小さな巻物」（黙示録10章）を食べ、ベレヤ的研究を通して歴史を前もって内面化することにより、十四万四千人は、サタンの欺瞞のただ中にあっても、「こう書いてある」との上に堅く立つための識別力を得る。彼らの備えによって、彼らは滅びに至るために退くことを避けることができ（ヘブル10:37-39;ハバクク2:4）、その後、神の戒め（とりわけ第四条）とイエスの信仰を守る、試され証明された勝利者として現される。彼らは、義人が信仰によって生き、御使いたちによって守られる一方、愚かな者たち（方法論とメッセージを拒む者たち）が強い惑わしに直面し、望みなき者となる、その最後の危機を切り抜ける者たちである。これは、『教会への証』第9巻の「王の来臨に備えて」と題する章（11ページより始まる）と、その9/11の象徴性とに一致しており、それによって、9/11から日曜法に至る期間が、賢い者たちがダニエル11章の成就の完結を理解し、過去の聖なる歴史における神の導きを忘れること以外には何も恐れぬ、封印の時であることが示される。

四つの記事は総体として、ユダの部族の獅子であり、またアルファでありオメガであるキリストが、時宜にかなってダニエル書第十一章の諸部分を解き明かし、十四万四千人の最終改革運動を導かれるという預言的解釈を提示している。1989年、1863年のアドベンチストの「反逆」から126年後、獅子はダニエル11:40-45を解き明かし、1798年に受けた教皇制の致命的な傷が、四十一節の三重の結合（竜、獣、偽預言者）において癒やされることを明らかにし、アルマゲドン、すなわち「栄えある聖なる山」へと導く。そこにおいて、教皇制は四十五節で最終的な裁きを受けるのである。この封印の解明はその運動の開始を画し、「教皇制と日曜法」に関する「知識の増大」（『セレクトッド・メッセージ』第2巻）を生じさせ、ダニエル12:10に示される「清められ、白くされ、練られる」という三重の試練を引き起こす。

これらの考察は、次の記事で引き続き取り上げることにする。